

研究発表

宇治の垣間見について

The “Kaimami” scenes of the Uji chapters

ルイス・クック*

The *Kaimami* scenes of the *Ujijūjō* are considered in terms of their function in the construction of plot and in the definition of the ‘point of view’ (consciousness) of Kaoru as hero. The difficulties presented by the *Kaimami* scenes in *Genjimonogatari* and particularly in the Uji chapters were noted by Imai Gen’ei in his article on *Kaimami* in early *monogatari*. Imai argues that in *Genjimonogatari*, the *Kaimami* scene is developed in excess of the requirements of plot, becoming a kind of spectacle which digresses from the line of the story.

The *Kaimami* scenes considered here are those of the *Ujijūjō* of which Kaoru is subject (in *Hashihime*, *Shiigamoto*, *Yadorigi*, *Kagerō*.) The suggestion offered is that these scenes should be read less in terms of their function in the plot than as serving to define the position and the ‘point of view’ of Kaoru as a defective hero, by complicating the distance between Kaoru and the female characters while es-

* Lewis Cook [現職] コーネル大学大学院生

tablishing limits on his reliability as an interpretant (and thus as a focal consciousness.) To the extent that they are, indeed, spectacle, the *Kaimami* scenes place Kaoru in the compromised position of spectator. This is consistent with and emblematic of the theme of the defective or problematic hero, which is a major concern of the Uji chapters.

源氏物語の宇治十帖初巻橋姫の中の垣間見場面の途中で、薫が八の宮の姫君を深い霧を通して覗き見、うっとりしながら、「昔物語に伝へて…〔中略〕…必らずかやうのことを言ひたる、さしもあらざりけむ、と憎く推しはかるるを、げにあはれなるものの隈ありぬべき世なりけり」と感動する。

古典全集本にはこの文に興味ある頭注が付いている。即ち「『けり』の語勢に注意。現実の中に物語的場面を見いだす感嘆」と。

ここで言う現実とは、勿論薫にとっての現実を指している。読者にとっては、物語の中に設けられている現実の中の物語的場面である。物語の登場人物が昔物語を引き合いに出して自分の置かれている現況を考えようとする節は、源氏に屢々見られるが、昔物語を逆説的に媒介にし眼前の対象を虚構させた形で確認しようとしているかの様な、ここに見られる薫の想像法には、独特な成分があると思われる。

例えば作者がここで薫の言葉を以て、「山里めいたる隈に」美々しい姫君が都の貴公子に発見されるといった、やや使い古された筆法に対する読者の反応を先取りしようとする技巧の一例なのではなからうか。この作者はそうした技巧を繰り返して弄している。この一段落の文脈から判断する限りでは、そういう様に読むにさしつかえないにしても、宇治十帖の全体に渡って表わされている薫の想像法の一貫したところに合わせて見れば、ここでの薫の感

想の意義は、そうした範疇内に留まらないと思われる。

仮に螢の巻に表出する光源氏の物語評論家としての姿勢、光の物語論を以て玉鬘を口説く口実にしようとする皮肉と比べて、薫が今まで懐いて来た昔物語に対する疑心があっさり崩れてしまい、覚えずに物語的世界に引き摺り込まれようとするその有様は、かなり対照的である。ということは、薫のこの感嘆に見られる作者の手法は、読者の反応を先制するというより寧ろ薫人物像を作り上げるための筆法であり、薫の位を相対化させ限定させる作用に主眼を置いてあると解した方がよいだろう。

何故かと言えば、次の二点が上げられる。(1)先ず薫の思い出している昔物語を、「もの隈」に隠れ住む麗わしい姫君が登場する場面に限定されてもよいように読み得る(古注釈にもそうした場面があげられているようだが)のに対して、読者の観点から考えると、よりそういった姫君が都の貴公子に垣間見られるという物語的場面を想起させる場面である。読者は垣間見ている薫の姿を見過ごすことはできない。先の言葉を繰り返して言えば、物語的場面を見だしている薫の視点と物語を読んでいる読者の観点との間に、微妙な、しかしこれから段々拡がって来る隔てがおそらくここに初めて認められる。

(2)そして、薫の視点と読者の観点を異にする又一つの要因は、若紫の巻の垣間見場面と比較すれば明らかになるが、若紫と橋姫との垣間見は、それぞれの物語の本筋を立てる為に、開始的な機能を共有している点が認められる。それ以上、その両場面の形成上の差異がかえって著しくなる。若紫の場合には、紫が光源氏の目を通して初めて読者の視座に入って来るのも勿論、更にと、藤壺と似ている一点を飾る空白人物として、光の権力に左右されながら物語の中へ導入されるが、光源氏の視線に領される配偶者としての紫の被視的造型への作者の配慮に於いても、光源氏の絶対的主人公たらしめる条件がこの垣間見場面での紫の登場仕方にも満たされているとってよいだろう。これに対して、橋姫の垣間見場面では、地の文の「描写」や、八の宮と

歌を詠む場面を通して宇治の姫君が読者にとっては（薫にとってよりも）既に知られている点に注意すべきである。古今の注釈書に論争されている楽器配置の問題は、言うまでもなく薫を除いた読者と作者との間のやりとりであり、最終的に、「薫の視線を通して姫君を見ている」という虚構を腐蝕させるところにしか意味がないかも知れない。いずれに読者の観点は薫の設定された視点に優先するし、姫君のいわゆる「内面生活」が薫の媒介にばかりでなく場合に応じて直接読者へ露呈されるにつれて、薫の視点の限定性がさらに強化する。後でこの橋姫の垣間見場面に戻る必要があるが、宇治の垣間見（ここで取り上げる場面は、薫が主体となっていて覗き見るところに限るが）の特徴を捕捉するために、先ず「垣間見る」という動詞の物語に於ける機能について簡単な考察を加えておきたい。それに、今井源衛氏の垣間見に関する論文（「古代小説創作上の一手法」国語と国文学昭和23年1月）を踏まえることにしたい。

氏の論文では、全体的に、源氏物語の垣間見場面が物語の本筋から分離する傾向を示しているという指摘が一要点となっている。その顕著な例として、椎本、宿木、蜻蛉巻々のそれぞれが含まれるが、宇治十帖の垣間見場面の読解上の問題を伴う事を語っている。薫の物語が終尾に近づけようとしているところの蜻蛉巻の長い入り組んだ垣間見を、女一宮物語の下書と見る構想論で解釈する説もあるが受け入れにくい。蜻蛉の後半の全体を、浮舟再生を薫に通知する為の設定という読み方は、現行の物語に一致している利点を持ちながらも、今井氏が言われる、その垣間見場面自体、（又は薫がそれを再現しようとする工夫も、）筋立の必要を超えて独立した spectacle にすぎかねないとの指摘を避けて通った様である。

一体宇治の垣間見を読むには、かかる問題提起を認めざるを得ないだろう。とはいいいながら、一般論として垣間見場面の物語に担う意義性を、筋立の元素としての機能性にのみ探ろうとする限りでは、遊離すると言われるのは、ある程度、その解釈法の内在論理より必然的に生じて来る結果でもある。換

言すれば、叙述の順路に従って話筋をその denouement の方向へ押し進める機能性を単一的尺度として物語を構成させるそれぞれの場面なり言葉なりの価値を計ろうとすれば、最終的にやや小説主義めいた読み方に陥入る結果が避けられなくなる。言われる通り、宇治の垣間見場面は、多分正篇のそれらよりも、spectacle にすぎない趣をも示している。が、そうだとすると、つまり薫が、その光景の前に置かれた spectator として位置付けられるのだとすれば、宇治の姫君の生きている「現実」から薫の視座への距離は、spectacle と spectator を隔てている距離でもある。かかる距離が、対象の理解を拒否し、対象の幻想化を生ずるところにその本質があろうとすれば、薫とその女性のゆかりとの諸関係の限界は、ラカンの用語で言えば想像界の限界として画かれ定義されているということが、その薫の垣間見に表徴される。或は、もっと文芸用語的に言えば、筋立を形成させる一手法としての本来の用途から外れて来たかと思われる宇治の垣間見場面は、薫とその相手の女性との間の隔て、又それと重ね合ってくる主人公の視点と読者の観点との間の偏差が、一種の ironic distance を強化させる作用を持っていると見てよいであろう。

垣間見するという動詞が物語の筋立に果たす機能を簡単に分解した上で宇治の垣間見場面の特徴が一層はっきり見えて来る。色好み物語の本筋を構成させる基本的段階をその機能性によって分析すると次ぎの三つが出る：(1)(男主人公が女性に接近しようとする) 動機・契機の提供。(2)物越対面(すだれなどを隔だてた逢瀬し、会話、歌を交わす)。(3)結末(男が女に直接逢うこと)。これらの段階を図式的に例証させるために、伊勢物語の第九十五段が上げられる。そこでは、男が女に「つねに見かわして」いるとは、動機提供する機能を果たしているが、一般的に、同じ機能が、垣間見、立ち聞き、噂などによって果たされる。いずれにしても、垣間見を含めてこれらは色好み物語を開始する機能に限定されるので、物語の叙述として敷衍される可能性を有するのは、以上の第二段階に限られていることは自明であろう。(第三の方が拡張されると、物語が色好み物語から恋愛物語へ変質することになるといって

よい。)西洋の最初の長篇小説は求婚譚であったことも同様な条件に因ったものであるが、物語の場合には、精神的又は言語的な因子を含めて主人公の男と女を「隔だつる関」を持続させたり複雑化したりする方法を以て色好み物語を長篇化させる可能性をはらんでいたと思われる。

ところが、垣間見は、物語を開始する役割に限られる行動として、色好み物語の範囲内では、拡張される可能性がないはずだったから、宇治十帖の垣間見、特に椎本と蜻蛉のそれらが、本筋から遊離することは当然の結果でありながら、一方、宇治十帖の物語が、本来色好み物語の典型に抵抗する、或はその型を問題化させる試みとして作られたということを意味していると認めなければならない。

橋姫の巻の垣間見の表現にもそうした意味が読み取れる。この垣間見場面の設定には、伊勢物語の初段の影響が見られるとよいが、伊勢の初段は、色好み物語としては中断されているにしても、先に述べた図式で言えば、男が「垣間見て…心地感ひにけり」という言葉には、第一段階を成す固定したsequenceが見られる。固定したというのは、垣間見が主人公の「性格」を規制するという意味である。こうしたsequenceが橋姫に使用されることは、「世づかぬ」薫を物語主人公たらしめる為には不可欠であったからであろう。(ある程度、宇治の垣間見場面の敷衍させたことが、薫には動機を提供するより養なう必要があったということを強調するためであるとも言えよう。) 橋姫の文章には、伊勢初段の「心地感ふ」という文句に当たる言葉が「心移りぬべし」という形で表われる。ところが、草子地である限りでは、作者の予言めいた推量でもあり、薫の「意識」=人物として与えられている視点(主体性)から分離させたことばとして表われることに注意すべきである。薫が垣間見る前に宿直人に向かって言ったせりふの中の、「我はすきずきしき心などなき人ぞ」という自己弁解に対する皮肉である一方、薫の垣間見ている途中の心内詞との離接的關係から意義をもたらされる。即ち薫の心内詞と作者の草子地とのずれには、先に述べた薫の思い出している昔物語の葎の門の美女

といった場面と、作者が読者に想起させようとしているかと考えられる垣間見場面との差に収斂して来て、薫に対するironyを生じる効果をももたらす。

「心移りぬべし」という短いコメントは、薫の主人公としての宿世を規定すると言ってよい。同時に、極端な言い方をすれば、その言葉が作者の推量から主人公の回想的心内詞へ置き変えられる過程自体には、薫の経歴が画かれているとも言える。女一の宮を垣間見るのが契機に、橋姫の垣間見場面から辿って来た自分の道をふりかえって反省する薫の「やうやう聖になりし心を、ひとふし違へそめてさまざまの思ふ人ともなるかな」という感嘆は、例の「心移りぬべし」という文句に呼応する限りでは、橋姫の段階での視点＝意識の欠如がある程度、微小の程度、補足されて来たことを語っている。これについて蜻蛉の巻の最後の一場面、回想にふけて「ありと見て手にはとられず…」との薫の独吟歌は、彼のspectatorとしての位置、その位置の欠如への反省として読解出きよう。この限りでは、宇治十帖の全体にわたる垣間見場面については、薫の物語に句読点をつけながら、筋立を構成させる機能よりその主人公の視点の問題性を具象させる手法としてその意義を探るべきであろう。

討議要旨

井伊春樹氏より、宇治の垣間見の場面で、大君・中君の区別について解釈上の問題があるが、発表者はこの場面で、大君・中君の区別（対比）よりも組合せそのものの方が重要であると述べているが、その視点をもう少し詳しく述べて欲しいとの質問があった。発表者から、読者にとっては区別(対比)の問題はおもしろかろうが、見ている薫の立場に立てば、そんなことはどうでもいいことで、組合せが重要だったと思う。従って作者の主眼もそこにあったと考えるとこの答があった。

岡田英樹氏より、宇治の垣間見の場面で、語り手が「むかしものがたりな
どもかたりつたへて」というところがあるが、これは螢の巻で、源氏が玉鬘
に、この物語はこの世に存在しなかったというような事を話す場面があって、
同時に読者に向って、物語のプロセスを問うているのだが、この二つの部分
はほぼ同似のことではないかとの質問があり、発表者より、少し意見がくい
違うと思うとの返答があった。